

289 グラムで出生した超低出生体重児が 20 歳に  
—成人した超低出生体重児として日本最小—

新生児医療の進歩はめざましく、日本において 1000 グラム未満で出生する超低出生体重児の救命率は最近では約 90%とされています。一方、1990 年代までは超低出生体重児の救命率は低く、*The Tiniest Babies* (注 1) によると、過去 (2019 年 7 月 23 日現在) に出生体重 300 グラム未満で生存退院した児は世界で 28 人ですが、そのうち 2000 年までに退院した児は 3 人に過ぎず、当時 300 グラム未満の児の救命は、現在の 10 倍以上難しかったと言えます。世界で初めて成人を迎えた出生体重 300 グラム未満の赤ちゃんは、1938 年にイギリス・タイン・アンド・ウィア州 (サウス・タインサイド) にて、妊娠 34 週 283 グラムで出生した女児です。今回ご報告する女児は、1999 年に慶應義塾大学病院において妊娠 23 週 289 グラムで出生し、今年 6 月に 20 歳になりました。現在、企業で就業しています。



写真 1 : 出生後 (集中治療中)

超低出生体重児とは、出生体重 1000 グラム未満で生まれた赤ちゃんのことです。出生体重が小さい赤ちゃんは、体のさまざまな機能が未熟なため、呼吸障害、心不全、消化管穿孔、重症の感染症などが起こりやすく、救命が困難です。1960 年代の救命率は 10%未満でしたが、2000 年代になると 80%を超えるようになりました (図 1)。救命率が上昇した理由には多くの要因がありますが、日本においては、全国の周産期母子医療センターの

整備、妊娠中の母体管理体制の整備、NICU の整備と医療技術の進歩、医療 費の補助、医療従事者の献身的な努力が特に重要だと考えられます。

・母親のコメント 「とても小さく生まれた子でしたが、検査のときに血液が流れるのを見て、初めて抱っこしたときに温もりを感じ、ちゃんと生まれてきてくれたんだと安心しました。当時の看護師さんとの交流も続いていて、20歳の誕生日も一緒にお祝いをしました。誕生日を迎えたときには、『20年、生きてくれたね。』と喜びが込み上げました。成人式で着物姿を見るのが、今から楽しみです。」

・本人のコメント 「周りの友達にも恵まれ、20年間楽しく過ごしてきました。学校にも元気に通い、高校3年間は女子バスケットボール部で毎日のように部活動に励みました。就職して2年目になりますが、今は週に2日間パソコンスクールにも通って勉強しながら、頑張っています。私を産んでくれて、ここまで育ててくれた両親に、感謝しています。」



写真 2 : 2018 年 11 月 (京都旅行)

(1) The Tiniest Babies による出生体重 300 グラム未満の赤ちゃん (出生年順)

	出生年	出生国 (州)	出生体重	妊娠週数
1	1938	イギリス	283 グラム	34 週
2	1989	米国	280 グラム	26 週
3	1999	日本 (慶應義塾)	289 グラム	23 週
4	2000	米国	290 グラム	25 週
5	2001	ドイツ	290 グラム	23 週
6	2002	イタリア	285 グラム	27 週
7	2004	米国	260 グラム	25 週
8	2005	ドイツ	270 グラム	25 週
9	2006	米国	284 グラム	21 週
10	2006	日本 (慶應義塾)	265 グラム	25 週

(全員が女兒)

日文新聞发布全文

<https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/files/2019/7/23/190723-1.pdf> )

文 : JST 客观日本编辑部翻译整理